

茶の湯文化学会会報 No.23

第23号 / 1999年12月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314

桂林観月茶会と陸羽伝教岩発見 —— 第一回桂林国際茶会 —— 倉澤行洋

一、観月茶会

中国の景勝地として名高い桂林で、風流な観月の茶会が催された。一九九六年九月二十七日の夜で、あたかも旧暦（中国では農曆という）八月十五日の夜、すなわち中秋の名月の当夜であった。折から一点の曇りもない名月が、会場の七星飯店の庭苑を照らしていた。集まった茶友たちは、月を賞で、名茶を味わい、即興詩を作り、国境を越えて仲睦まじく、脱俗の雅境を楽しんだ。

桂林は桂の樹の多いところである。桂林という地名もこれに由来するらしい。また地名が桂林だから、桂の樹を多く植えたということもあつたであろう。そういえば、筆者の住まいは京都の桂である。この桂の地名はどこから来ているのであろう。帰国したら調べてみようと思つたが、まだ調べていない。

中国の伝説では、月に広寒宮という美麗な宮殿があり、その前に大きな桂の樹があるという。この伝説により、桂は月に格別に縁の深い植物になった。月の異名を桂月・月桂などというのはここに起源する。

桂と月とがこのように縁が深いのであるから、桂樹の多い、その名も桂林で、観月の催しをするのは至つ

て似つかわしいことになる。主催者が桂林で観月の茶会を催すことに着想したのも、多分こういうことによるのであろう。

中国の桂樹は日本の木犀にあたる。桂（木犀）の開花期と中秋明月とは重なることがよくある。木犀の馥郁たる香りに包まれての観月が、ひとしお興味深いことは筆者もたびたび経験している。桂林の観月茶会の席に桂花の香りが漂ってきたら、どれほどすばらしいことかと思われるが、残念ながらそれはなかった。あと一週間遅ければ、桂林の街中が桂花の香りであっただけになったのに……と、地元の人たちがぐやしがっていた。

桂樹を門前に植えた月宮殿（広寒宮）には、三十人の天人が住んでいるという。これは謡曲『羽衣』から得た知識である。その一部を引けば、

白衣黒衣の天人の数を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定めて役をなす、

白衣の天人十五人、黒衣の天人十五人、合わせて三十人の天人がいて、夜毎交代で十五人ずつが宮中で奉仕する。十五人すべてが白衣の天人であれば満月となり一名が黒衣の天人となると十六夜の月となる。十五人

た国内では茶の消費も伸び、輸出に力を入れなくてもよいという気運が生じる。明治から紅茶の生産も始まり輸出も行われたが、紅茶の輸入の自由化で趣味的なものだけが残った。他にソ連の南方で飲まれていた茶に対応するものとしてぐり茶が輸出されていた。またモロッコの人々の嗜好に合うものとしてぐり茶が輸出されてきた。このほか主に九州で煉瓦状の磚茶もつくられていた。

いま、茶の多目的化が進んでおり、飲用以外の茶の利用が盛んに行われている。今後想像できない分野で茶が使われることになるだろう。

番茶から煎茶へ

中村 羊 一郎

番茶という言葉は、一番茶二番茶の数を省略した「番茶」からきているとか、遅く採るという意味での「晩茶」からきているとされる。煎茶は、平安朝の詩文集に「煎」の文字が使われており、古くは餅茶を炙るもしくは釜に入れた茶の粉末を煎じることがなされていたことがわかる。十七世紀の初頭ロドリゲスの書いた『日本教会史』には茶を煮出して飲んでいたし、当ても農民などの間ではまだ

それが飲まれていると記されている。煮る茶の伝統があったということである。

しかし、いま煎茶といえは、よい茶の芽を蒸して乾燥させ、それに湯を注いで出して飲むというものである。現在の煎茶は有名な宇治の永谷宗円の開発したもので、茶のよい芽を蒸し焙炉の上で揉むというものである。これは番茶の製造上必須の揉むという技法と碾茶の製造上の技法である蒸す技法を結合させたもので、番茶と碾茶両方の茶を見ることが出来た宗円こそが開発できた。これは深い緑色を示すことから、青茶とも呼ばれる。これを江戸の山本嘉兵衛が評価し、全国に広がっていく。茶が高い商品価値を持つものとして認識されていくということを示す。山本屋



第十八回、第十九回、第二十回の東京例会が東京学芸大学を会場として開催された。概要は次のとおりである。

一九九九年七月二十四日第十八回

「俳諧の茶の湯」について

矢野 夏子

「俳諧の茶の湯」は、茶事の進行中に俳諧の興行を同時に行う茶会の一形式である。懐石・濃茶・薄茶といった一連の茶事の進行中

に、亭主と客それぞれが、手前が行われていない時間を利用して俳諧の興行を行う。

私は、先に現存の資料中、寛政八年刊俳諧撰集『むかし合』所収「夕兒の」の巻（藤園堂蔵）を取りあげて連句の注釈を行い、その興行実態について分析を試みた（『茶の湯文化』第四号）。

本発表では、明治十九年写『俳諧之茶事』所収「多もいはじ」の巻（柿衛文庫蔵）の進行を分析し、前述の資料及び他の資料の比較を通じて、以下の三点を指摘した。

一、二つの資料は途中まで進行を共にしており、一定の形態があるように読み取れた。しかし、これはそもそも茶事の形態が初座から後座における濃茶手前までは完成されているにもかかわらず、俳諧興行はその中に組み込まれざるを得ないため、必然的に進行が一致した結果であり、濃茶点前以降は進行に変動がみられた。

二、両者とも俳諧の形式は半歌仙で、亭主が発句を詠んでいた。亭主の発句は一般的な俳諧興行からみると異例なことである。これは「俳諧の茶の湯」において、発句が亭主からの興行開始の挨拶であり、茶事における趣向を明示する役割を果たしているのではない

かという点を、句の注釈によって推測した。ただし管見の全資料が亭主の発句というわけではなかった。

三、両者の俳諧の記録は通常の俳諧の記録の書式に対応しておらず、実際に付け進めた句数に区切って記録されていた。両者の記録は、興行終了後、茶事の記録すなわち茶会記と、俳諧の記録すなわち懐紙を再構成して作成されたものであった。そこには「俳諧の茶の湯」の進行に忠実な記録の編集という製作者の意図があると考えられる。それは連句作品の内容が、巻かれた場を反映しているという意識の表れであり、言い換えると、制作時の記録、つまり茶会記が連句作品の制作状況の解説の役割を果たしているとの判断が見出せる。

一九九九年九月二十五日第十九回

蒲生氏郷の評価

深谷 信子

利休七哲のなかで武家茶湯者として著名なのは、古田織部と細川三斎である。それに比して蒲生氏郷の茶湯者としての評価は低い。

だが、『利休の手紙』（「六七、十一月八

東アジアと見事に繋がっている。番茶は東アジア茶文化を考える上で貴重な存在である。

日松嶋あて」・「一八〇、日付不明 松嶋あて」・「一六八、十三日 羽忠あて」等の利休の書状を見ると、氏郷は利休と茶の湯を通じて互いに心底から尊敬しあう「直心の交わり」を持っていたと考えられる。

また、『利休の手紙』（「一一八、二十八日蒲忠あて」・「細川三斎御伝授書」・「江岑咄之覚」・「山上宗二記」等から利休がわび茶道具（楽茶碗・利休形茶杓等）を創造する際に、氏郷が相談相手になっていたことが明らかにになった。

その結果、天正十四年頃の楽茶碗のなかでも無類と言われ、諸人渴望した「早舟」、利休茶杓の白眉と賞賛される「二尊院」の両器ともが氏郷に与えられた。利休は氏郷の茶の湯の力量を高く評価していたのである。

さらに、『氏郷記』・「茶湯古事談」・「少庵召出状」・「随流斎 寛文八年本」・「千利休由緒書」等、そして近江日野・松阪・会津若松・紀州和歌山に遺された史料を考察してみると、氏郷は利休切腹の後、他の大名達が秀吉を憚るなか少庵を匿い、「利休の茶」の絶えるのを惜しんで、不治の病で亡くなる寸前に、少庵の召し出しを実現することによって千家を復興させている。

寛文三年、表千家四代目江岑宗左は『江岑夏書』に、

一、利休弟子衆七人衆と申は、一番にかもう飛騨守殿

と記した。ここに千家の氏郷に対する敬意と恩義を見ることが出来る。

茶道史上の氏郷は、「少庵召出状」を書いて利休の茶を四百年後の今日まで伝え、山上宗二の言うわび数寄の「手柄」を立てたのである。

一九九九年十一月二十日第二十回

豊臣秀吉所持の名物茶器に関する一考察

竹本千鶴

豊臣秀吉の茶湯事績に関する研究は、戦前より文化史、茶道史、中世史などの各方面から様々に行われており、その風体や政治と密接に関わる様子が明らかにされている。

しかし、膨大な先行研究があるにも関わらず、秀吉が所持した名物茶碗の具体的な研究は一部の有名な名物をのぞいて殆ど行われていない状況である。

言うまでもなく、当該期の権力者を巡る茶湯は、名物茶器中心のいわば道具茶であったことから、政権担当者が所持する名物全体

の調査は必要なことだと思われる。このような問題意識から、私はかつて、織田信長が所持する名物茶器の全体像を調査し、それをもとに織田政権下の茶湯の場の政治性について検討したことがある。今回も同様の視点で、秀吉が所持した名物を具体的に明らかにし、その名物が持つ伝来や入手方法を明確にし、豊臣政権下の茶湯を検討するための足がかりにしたい。

秀吉が所持したと思われる名物の総数は、現在のところ三一九点確認できる。この三一九点を出典史料の信憑性をもとに、表①と表②（会報編集者注）ここでは表は省略しました）に大別した。その際、出典史料の記主が秀吉の名物を実際に見聞していることが、その史料の信憑性を考える上でのキーポイントとなっている。現段階では表①には、二六〇点の名物が確認できる。

次に表①の名物に関して、個々の名物が持つ伝来に着目し、その名物の性質を考えると

- A、かつて信長から拝領したもの：一二点
- B、信長旧蔵のもの：一一点
- C、織田政権下の部将旧蔵のもの：一七点
- D、諸大名からの贈答品：六六
- E、豪商からの贈答品：九点

という五つに大別できる。

さらに、秀吉がこれらの名物をいつ入手していたのかという点、

一、織田政権期（天正十年六月二日まで）

二、二点

二、政治的混乱期（天正十三年まで）

一〇四点

三、関白在任期（天正十四年から十九年まで）

一〇六点

四、太閤期（文祿元年から慶長三年八月十日まで）

二二点

となっており、ことに政治的混乱期のわずか三年ほどの間に、コレクションの三分の一の名物を集中的に収集していることに注目できる。

最後に、秀吉がこれらの名物をどのようにして入手したか史実に基づいて検討したが、ここではその検討結果のみ記しておく。一、秀吉自ら名物を創作する、二、相手に強制的に名物を進上させる、三、戦利品や服従の証として進上させる、四、秀吉の家臣が遺言などによって秀吉に進んで献上する、五、入手経緯が不明なもの、という五つに大別できる。

以上、報告での要旨をまとめたが、今回の報告はいわば研究ノートの基本的作業であ

る。今後、今回の作業結果をもとに秀吉の茶会や豊臣政権下の饗応の場を明らかにしていきたい。



「花」のない庭が「心」を平和にする

小口基實

ウイーン（オーストリア）のシェーンブルン宮殿のなかに約八〇年前に造られた日本庭園らしき庭を発見し、それを復元整備、そして、その両側に枯れ水庭園と茶庭を作庭とあいなった。ウイーン博覧会以後、明治、大正時代にジャポニカブームの影響でできた庭である。今の日本のイングリッシュガーデンブームのようだったらしい。調査から作庭まで参加し、特に作庭に関しては、私が中心になつての工事だった。今年の秋九月の約一ヶ月の工事期間中の、地元の人達の質問では、

「いつ花を植えるのか？」

「どんな花を植えるのか？」

「どのような形（デザイン）で植えるのか？」

というのが一番多かった。

そのたび私は「花はない」と答える。彼

らは首をかしげて立ちさる。

そして、出来上がった石と砂と苔と竹垣の「ツルカメの庭」、門と塀との待合と野天茶室との「茶庭」の二つができた。庭を見てワンドフル、ビューティフルの賛美の連続であった。

そして感想は、「心が落ち着く」「心が沈んでゆく」というもの。通訳の女性が、ドイツ語には、「落ち着く」という単語がないのですという。……納得。

また、水琴窟の音を聞いて、「心が吸い込まれていく」「神秘的な音だ」「東洋の精神を感じる音だ」というような言葉が多かった。

日本の庭師や造園家が外国に庭を造るときに、外国人は花が好きだから、花の咲く木や低木を植えてやった方が喜ぶと聞かされて、花を植えることに気を向ける。そうすると、何となく日本的でなくなり、中国風というか韓国風の庭になる場合を海外でいくつか見た。

発見した八〇年前の庭もそのような花とロックガーデンというものであった。

この工事以来、日本の庭は花を追い出して「ワビ、サビの世界」を創りあげたということに一層の確信を持った。

江戸時代、文化の多くは、隠居文化として

日本全国へ普及していった（私の研究ジャンルも地方庭園文化史である）。どの地方でも、老人達の手なぐさみとして、坪庭造りは発達したのである。

その老人達が「さびしい」「わびしい」という老後を、消極的な人生を、「さびしい」「わびしい」のが自然の法則でよいことであると肯定的、積極的に考え、「ワビ」「サビ」という美意識を江戸時代末期に完成したのが日本の文化だろうと考えるに至った。人生を落ち着いて、ゆつくりと、悔いなく、死にたいというのが日本人の願ひであったということである。

日本の文化の大半は、「落ち着く」「自然である」「清潔」「品」ということに終止する。それは江戸時代三〇〇年の安定した社会の中で出来た人生観である。

革命も戦争もない、大塩平八郎や由井正雪など内輪もめ程度の内乱しかない平和が続いた江戸時代。「ワビ、サビ」の世界は、きわめて争いごとをしない隠者文化の世界なのである。

千宗室氏の言う茶の湯での世界平和は本当のことであるという私なりの確信を持った

庭造りであった。

研究会のご案内

第十二回の研究会が二月二十日一時から東京四ツ谷のプラザエフで開催されます。詳細は後日ご案内しますが、概要は次の通りです。

研究発表

茶道における「わざ」と「かたち」

― 関係論的知識観への示唆 ―

生田久美子氏

井原西鶴『日本永代蔵』「茶の十徳も一度に皆」考

石塚 修氏

南蛮島物茶器の成立と背景

西田宏子氏

講演

題未定

加藤栄一氏

例会のご案内

東京例会

次の日程で開催します。会場は東京学芸大学（小金井）。ふるってご参加ください。

○一月二十二日（土）午後二時

「五山文学における喫茶」 趙 方任氏

近畿例会

次の日程で開催します。ふるってご参加ください。なお、会場は京大会館です。

○一月七日（金）午後六時半～八時半

シンポジウム「茶の総合的研究に向けて」

発題者

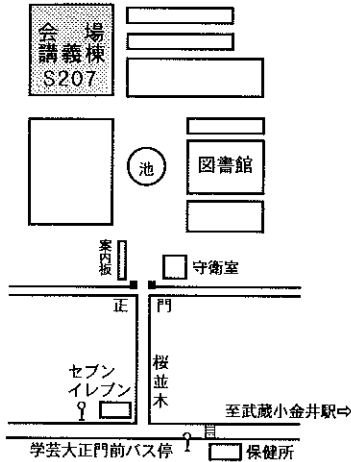
小西茂毅氏（静岡大学名誉教授）

小泊重洋氏（お茶の郷博物館長）

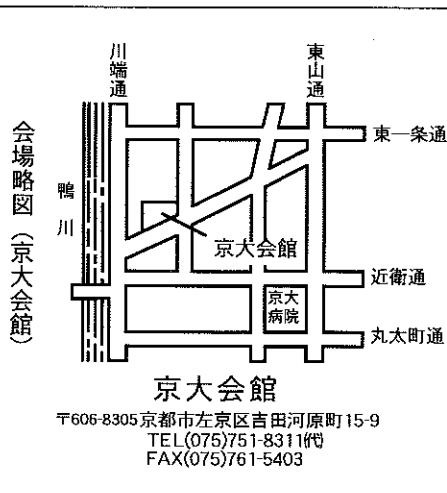
谷端昭夫氏（裏千家学園教授）

影山純夫氏（神戸大学教授）

会場略図（東京学芸大）



後記



*会報二十三号をお届けします。本年度の大会が十一月二十七日と二十八日の二日に行われ開催されました。二十七日は、大徳寺孤蓬庵での茶会、二十八日はホリデイ・インでの講演会、研究発表、さらにはシンポジウムと盛りだくさんな内容でしたが、参加者も多く盛り上がった大会でした。大会の詳細については、次号でご報告します。

*本会も日本学術会議の登録学術団体として認められることになりました。名実ともに学会となったということで、さらなる発展をめざしたいと思います。